

目次

・下経（四十八〜六十四）

四十八、【水風井（すいふうせい）】

こういう艱難な状況に陥っている時には、何を言っても世の中は信用しない。一旦退いて徳力を養う以外にない。上（目に見えて現れた所）が行き詰まったなら、下（直接目に見えない根っこ）に返り、そこに力を入れるのである。己に返り徳力（根本）を養う、これが【水風井（すいふうせい）】である。井とは、地の底を掘って自らが出る所（井戸）である。己を低きに置いて戒める。井戸は水脈を見極めて掘る。闇雲に穴を掘ればよいというものではない。

穴を掘れば、底に塵芥が集まってくる。底をよく掃除して塵芥を取り除かなければならない。井戸の水は始終汲み出すから良い。汲まずに置けば水質は悪くなる。

反省して実力を養う。下に返って建て直す。そうすればやがてまた力は外に現れ、勢いを盛り返すことができる。ここで大切なのは、①変わらない水脈（道徳）に井戸を掘る。②井戸水を汲み上げる釣瓶（挙げる人）③引き上げる人の存在、である。②と③を邪魔する者が出てくることもある。

全て物事が成るのは、多くの努力を積んだ結果であることを考えなければならない。努力に努力を積み重ねることなく、繁栄を望むのは道理から外れる。

道理とは、自然の生成化育（造化）の道に基づいて、人の道を立てたものである。従って、国により風俗習慣なども異なり、また時代によって様々に変遷はあるけれども、道理は変わらない。「人々が親しみ合い、敬い合い、助け合ってお互い向上発展していく」という人間の本性は変わらない。人と人との誠心がお互いに照らし合いさえすれば、いくらでも発展する。しかし、その本性を無視しては必ず行き詰る。どんなに文化の程度が違っていても、人が同情を持たず、他人を無視して我儘放題やって、それで栄えていくという道は必ず行き詰る。本性に反するからである。学問も政治も、その本性に基づいてなされなければならないのであり、「王道」というものもここに帰するのである。そこを無視して、好みやテクニクやノウハウ等を重視するようではいけない。極意を知るには数をこなすこと。

易経や論語等の経書に説かれていることは、特別なことではない。人間の本性をよく見極めて、人間に満足を与えるための道を、自然の生成化育の道に倣って立てたものであり、あくまでもその根本は自然である。だから、道徳とは堅苦しいようなものではなく、最も自然なものである。

#### 四十九、【澤火革（たかかかく）】

世の中は平和に越したことはないが、何事も久しい歳月を経れば、その間に弊害の起ることも免れない。その弊害を改めて新しい時代を作るということは最も大切なことで、新しい改革がなければ、人心は沈滞してしまい、ひいては国の進歩発展ということもあり得ない。井戸も古くなってくると、中に垢が溜まる。不潔なものがあれば、底からこれを取り除かなければならない。世の中も同じで、世の中が古くなって久しくなると、悪い輩ばかりが集まってきて治まらない。

従って、時に改まるということは必要なことである。その時に生じる争いや衝突というものは決して好ましい者ではないが、一時の争いや衝突、混乱というものが進歩を促し、発達を来たすならば、後々の幸福当店から考えてもやむを得ないことである。つまり、進歩発展・繁栄のためには、絶えずそのための努力をしなければならぬ（闇雲な努力ではダメ）。進歩発展のための道筋をつけて変革を興す、これが【澤火革（たかかかく）】である。火の中に古い金を入れると、金の中に不純物があれば、それらは皆消滅して純金ばかりが残る。革とは古いものを悉（ことごと）く取り除き改めることである。改めるとは、新しい道を選んで進むことである。

そもそも人間は、骨の折れることを嫌う一面があるから、やらなければならないことも、骨が折れると、ついやらない。改めなければならないことも、そのまま済むならば、そのまま押し通そうということになりやすい。また、これとは反対に、どんなことも革新革新と騒いで急進したがる一面もあり、革新ではなく破壊に導くことも少なくない。

従って、改革を指導する者（仁義礼智を備えた者）は、改革を唱えたために社会から迫害を受けるのが常である。なぜなら、一般人はそれほど思慮分別が発達した者ばかりではないからである。一般の人たちは、改革の後になってこれを信じるようになるものであるから、改革する者はどんな迫害を受けても、気概と誠心を以て全身全霊を打ち込んで、長期間改革に取り組まなければならない。善いことは結局最後には実を結ぶものである。そのときにしようじ

#### 五十、【火風鼎（かふうてい）】

物を新たにしていくとは、【火風鼎（かふうてい）】である。鼎とは「盛んである」という意味であり、鍋の具材がグツグツと煮込まれて、皆が美味しく食べられるという様子である。鼎というのは、その中に物を入れて煮（に）るための器である。どのようなものでも煮れば変わってくる。

全て古いものは、中をよく掃除してからその中に物を入れて煮(に)る。煮ると堅いものが柔らかくなって、よく改(新)まり盛んになってくる。生の時より新しい味を持つてくる。これが、物事を新たにした後の様子である。

煮るためには、色んな材料や条件が要る。即ち、それぞれが定まった場所を占めて、それぞれの立場において任務を全うすることで、初めて世の中は進んでいくし、人もよく養える。

その国を盛んにするためには、色々な条件が完備していなければならない。しかし、その条件を立てて運用するのは人間であるから、根本は人間である。そこで人間が一番大切である。とすれば、人の調和を図り統一を図るのは、上に立つ者の責任であるから、上に立つ者の責任は特に重い。そして、こういう時代は永く続かなければならない。一時だけ盛んであっても何の甲斐もない。従って、上に立つ者もその覚悟を以て日常の行いを慎んで、身を以て人の手本となるという考えでなくてはならない。また、これを助ける臣下の者たちも一時の成功に心が驕って、その努力が緩むというようなことがあつてはならず、どこまでも協力一致の状態が永続きするということが最も大切となる。

#### 五十一、【震為雷(しんらい)】

鼎という器を司る者は、父の後を継ぎ、その家を益々発展させる務めを持つ家長(長男)である。家長が動いて万物を養っていくのである。世の中に大きな激変があった時に、その激変によって奮い立つ自分の国を健全に保っていくような道を立てれば、その国は永く繁栄していくことを示している。煮た後の新たな動き始め、これが【震為雷(しんらい)】である。雷は、天上に鳴り渡って雲を深くして雨を降らせ、地上を潤して万物を生成化育させていく。人間の家も同じで、その家を継ぐ者は、一時大きな影響を外から受けたことが、かえって自分の家を盛んにする本となるということを考え、境遇に負けず、大いに努力してその境遇を制して家を栄えさせることが大切である。世の中というものはいつも平穏なものではないのであるから、不時の出来事に出会って驚くようなことでは、決して健全な発展は望めない。その出来事を寧ろ善い方に利用して、家も国も盛んにしていく道を考えなくてはならない。後に出た者(長男)は、先人(父親)よりも、先へ進んでいくことを心掛けなければならない。これは一身の上でも同じことで、如何なる身体の碎けるような大事件が起きても、そのために心が狂うようではいけない。事に驚かず、よく制して鍛錬発展の本とするよう覚悟を決めて胆力を養っておくことが大切である。そのためには、そのできごとを平生から道を学ぶことに力を入れることである。

#### 五十二、【艮為山(ごんざん)】

しかし、終始動いてばかりでは力尽きる。そこで、活動を中止して静かに力を養って次の活動に備える心掛けが大切になる。動いた後の止まり、これが【艮為山(ごん

いざん)】である。良(ごん)とは止(定)まるという意味である。妨げを受けて進めない場合もある。世の中の為に尽力しようとしても、その心持が認められない。或いは人が協力してくれないという有様である。良とは人の体でいえば背中である。背中は動かさない。動くものは皆前にある。従って、欲は前から起こる。後ろには欲がない。無欲である所にとどまって動かさないことである。世の中は欲の世界である。この世の中に背中を向けている状態でもある。我に欲がないから、他から来る人もいない。人と交わりを結ばずに一人で道を楽しんでいれば、どこからも咎を受けない。

但し、止まるが宜しいと言って、進むところで止まるというのでは、必ずまた弊害が出てくる。そこを注意しなければいけない。止まることであつてこそ、また更に進む力も生み出される。次に進むために、道を究めて己の力を養うことを専らにして、再びその力を振るう時を待つのである。

世の中というものは始終変遷するものであるから、上手くいく時もあれば、いかない時もあり、思いを遂げる時もあれば、遂げられない時もある。急ぐことなく心を落ち着けることである。

#### 五十三、【風山漸(ふうざんぜん)】

勿論、止まる目的は、力を養ってまた然るべき時に更に大いに進むことにある。止まる方へ片寄つてもいけない。進むべき時が来たら順序を以て進む、これが【風山漸(ふうざんぜん)】である。漸とは、順序を以て進むことである。あまりに急に進んでも途中で頓挫するし、ゆっくり進み過ぎても進むことの甲斐がない。急な発展ではなく、順序を以て段々発展していく。正しき所につき、永く努力を重ねていくのである。

#### 五十四、【雷澤婦妹(らいたくきまい)】

進んでいく中で、我が身が落ち着くところ、定まった所を得なければならぬ。己の定まる所を持つ、これが【雷澤婦妹(らいたくきまい)】である。婦妹とは、婦人が嫁入りして一家の妻となつてその居場所を得ることである。これは若い女が嫁いでいく時の有様を借りて、上に立つ人とその下に属する人とが協力して、ひいては国中の人の協力一致を以て、国を盛んにすることに努めていく様子を示したものである。嫁に行くというのは、その徳を望まれて行くのはめでたいことであるが、女が自ら夫を求めて行くというような謙遜を欠いたことをすれば、一時はよくても結局は宜しくない。なぜ自ら夫を求めて行くのが良くないかといえ、そういう時の女は巧言令色のところが有り男を喜ばせて行くのでは、仁に欠けるからである。

仁義礼智の徳を磨き、謙遜の徳を忘れず、望まれて嫁入りした以上は、その家の為に心身を打ち込んで尽くすことが大切である。そうしてこそ、皆から信頼を得ることができ、立場と居場所を定めることができるのである。

国に於いても家に於いても、人々がその居場所を得て、調和の状態が実現されてい

ることが、発展発達のために大切である。

五十五、【雷火豊（らいかほう）】

そこで、帰する所があり、定まった所を得れば、物事は必ず大きく盛んになってくる。定まった後盛んになる、これが【雷火豊（らいかほう）】である。豊とは、ものが厚く一杯に隅から隅まで満ち満ちていることである。大きくなり物事が盛んになることである。

雷も火もどちらも滞っていないで盛んに動いていく。そもそも、物事というのは停滞してはいけないので、もし進歩していかないのであれば、その時から退歩しているのである。これは個人にとっても国家にとっても同じであって、絶えず進歩していかなければ、その盛んな状態を保ち続けるということはできるものではない。

上に立つ者が常にこういう心掛けを持っていないと、下は安寧を貪るようになる。また、上に立つ者の心掛けが悪いと、これを助ける賢者も出てこないから、全体が滞ったような状態になってしまい、自然と衰退へ向かうのである。それで、何としても上に立つ者の心掛けというものがとにかく大切になる。

五十六、【火山旅（かざんりよ）】

しかし、物事が盛大を極めると、先ず飲食衣服、そして住居が贅沢になり、驕りと油断が生じる。驕りを極めれば必ず滅亡するのは天地自然の道理で、「盈つれば欠ける」ということになる。そうなると居所を失い、逃げ出すことになる。破産して夜逃げするようなものである。定を失って動く、これが【火山旅（かざんりよ）】である。旅とは、我が身が安定を失い、旅人の身の上となることである。昔の旅は今と違って、知り合いも無く、危険も多く、大人数での危うい移動だった。

このような時は、困難に耐える覚悟と、礼を守って他の人と良く交わり迫害を受けないようにすることも考えなくてはならない。世の中は絶えず変化するから、小さな国でも大きくなることもあり、大きな国でも小さくなることもある。個人でも同じである。頼りない者が、何かの縁で頼りになる人を得て、その人の助けによって榮えていくというようなことも世の中にはある。それ故、心細いからといって失望してしまふものではない。まず、その境遇においてできるだけのことをして、将来においてまた発展の道を見出すように、仁義礼智を養い努めるのである。ただ腰を低くして詔（へつら）っているのではない。

五十七、【巽為風（そんいふう）】

旅人というのは落ち着く場所がない。落ち着こうと思えば、誰かの保護を受けて身を安んずる他はない。今まで贅沢三昧だったが、旅行している旅人という身の上では尊大ではいけない。従順でなければいけない。従順に人に入る、これが【巽為風（そんいふう）】である。巽とは、入り込んで従うということで、人に従いその保護を受

けて、まず身を安んずることができるといふ意味である。我が身を小さく低くして、人の所に入り込んで行くことである。私心を捨てて正しき道に従い、上に立つ人に従ってこれを輔け、世のため人の為に力を尽くす心持を表している。

巽は風や木を表す。風は形はないが、風が吹けば草木から山海と、あらゆる形あるものが動く。人間が私を捨てていく力も然りて、誠心を以て勉めている人の働きというものは、人を動かし、世の中を変化させていく実に広大なものである。至誠にして動かないものはないのである。

しかし、物事には中心というものが必要で、中心となるべき人物を得ることが問題である。その人物を中心として集まり、大小様々な仕事を各々が意義を認め、誠心を以て打ち込むことで全体として発展していく。発展していけば皆がその喜びを分かち合うことができる。従って、私を捨てるということは結局、己を全うすることになり、強いて求めないことが却って満足を得ることになる。

※【山風蠱】の卦は天子晩年になって、政が古くなって段々壊れてくる。その弊害を取り除くことが出来なくて天子崩御になる。で、太子が親の晩年の政の乱れたところから、小人が朝廷に入り込んでいる者を悉く除いて、天下を新たにして整えた卦である。この【巽為風】はそこまで至っていない（天子は死んでいない）。天子晩年になって小人が多く朝廷に入り込んでいて如何ともしがたいので、位を皇太子に譲って弊害を除く。【天山遯】の九五の嘉遯がこの卦に当たっている。照らし合わせて考えみることに。

五十八、【兌為澤（だいたく）】

他者のもとに入り、助けを受けて初めて安んずることができ、そこでまたお互いに親しみ合い助け合っていけば、心から打ち解けて力を合わせて物事を成就させ、喜べるようになる。心を通い合わせて喜び合う、これが、【兌為澤（だいたく）】である。兌とは、喜ぶという意味である。若い女がとても柔和な心持で一切の人に接して、よく礼を守り、また自ら勝手なことをしないで、周囲の人もこの優しい行いを喜んでくれる様子を表している。

人間は私を捨てて柔和で温厚な態度で人に接すれば、他の人もこれを悦ぶし、お互いがそういう心持であれば、平穩である。常に元気にしていれば、家の中が自然と陽気になり、家の中が明るくなる。それで、世の中のことは皆、この「兌」という心持ちでやれば、満足なことができるようになる。国同時も同じであって、お互いに自国の勢いを誇るとか、力で他国を圧迫することを慎み、他国の幸福も自国の幸福に思うようになれば、平和は期せずして得られる。

これは言い換えれば、内心は剛にして、人に対するに温和を持てるものである。しかし、もし内心に剛無くして悦ぶなら、それは媚び諂うことになり、また人に接するも剛を専らにすれば、悦びを失って暴にして人と和することができない。内剛外柔で

ある兌は、その全きを得るものである。

事を成していこうとするならば、苦しみを得ずして良い結果が得られるものでもない。困難を越えれば将来楽しい時が来ると、苦しみの中に楽しみを見つけ出していくこと（苦中有楽）が大切である。苦しんで失望したり自暴自棄になってしまっただけではない。

#### 五十九、【風水渙（ふうすいかん）】

喜び楽しんでいると、自然と気持ちが悪くなる。緩んでくると物が段々と乱れ散じていく。また、滞った状態が通り過ぎて、盛んになり広がりが発展いく様子、これが【風水渙（ふうすいかん）】である。渙とは、氷が溶けるように段々緩むに従って散じていくこと、物事が伸び広がっていく（発展）という意味である。風が水の上を吹くと波が立って、その波は遠くまで広がっていく、その様子を表したものである。世の中も同じ状態がいつまでも続くと、色々弊害が起こって万事が滞ってくるが、底に優れた人が出て、その弊害を取り除いて新しい機運を開くという時になると、その影響が全体に及んで皆が奮い立ち、その面目を新たにしていくようになる。皆が力を尽くすのは、この勝れた人物の徳に懐くからであり、優れた人物は己を誇ってはならない。これは天の助けであり祖先のお陰であると思って、自らその輔けに感謝するとともに、その輔けを絶対に虚しくしないようにどこまでも努力しようという決心が必要である。

#### 六十、【水澤節（すいたくせつ）】

しかし、広がり過ぎると力は衰えるし、物事は散乱して終わりという締まりのないことではいけない。そこで、また心を引き締めなければならない。節度・ケジメをつける、それが【水澤節（すいたくせつ）】である。節とは、物事にケジメをつける事であり、度を過ぎないようにする（節度を持つ）ことである。つまり、物事が極端に偏らずに中庸にあることを肝要とする。竹の節を以て止まるが如くに、しっかりと自らの心を引き締めることである。物事が盛んであることは良いが、度を過ぎていけば疲弊していく。しかし、力を惜しんでいたのでは、どんな事業も興らないので、いつも力を量って物事をする必要がある。ある限度の中において、懸命に努力することが大切である。

個人の生活においても節を守ることが必要である。贅沢は必要ないけれども、余りに質素であるというのも善いことではない。人の行いも、世のため人のために力を尽くすことは大切だが、自分の力を量ってやらなければ、力不相応のことをやって自分が苦しむだけでなく、結局世の為にならない。正しいからといって極端に走るのは苦節であり宜しくない。

六十一、【風澤中孚（ふうたくちゆうふ）】

心に締めりがあって、心に定まるところが出てくると、必ず周囲から信用が得られる。誠心を皆が感じるようになること、それが【風澤中孚（ふうたくちゆうふ）】である。中孚とは、心に誠があり、その誠を他人が感じて信用を受けるようになってくることである。孚があるといっても、それを相手が感じて我を信じるところがなければいけない。これを信頼といい、信用という。何事も人の信用があれば必ず事が興る。信義あるものに於いては、必ず事を行うことができる。

天地の気も、純粹で孚であるから万物を生ずる。人間もそれで生まれてくる。そこで人間も天より受けて我が身の中に宿っているところの孚、これは絶対に失ってはならない。

六十二、【雷山小過（らいざんしょうか）】

大げさなことはしないで、小さいことから次第に力を用いていかなければならない場合を示している。これが【雷山小過（らいざんしょうか）】である。小過とは、小さなものが過ぎるという意味である。小さな事から段々に力を用いていけば、大きな発展もやがて見られるという意味でもある。そこから「過」とは、力を打ち込むという意味になる。

国でいえばその盛んな時が過ぎて、衰えてきた状態である。この場合、皆がまず実力を養うことに心を用いなければならぬ。小さいようであっても、その小さな力を集めて段々と実力を充実させていくようにしなくてはならない。

小さな事に各自が力を打ち込んで、上下協力一致していく。平凡な小事に打ち込む時である。

六十三、【水火既済（すいかきせい）】

力を打ち込んで取り組む事で物事は成る。物事の完成、それが【水火既済（すいかきせい）】である。既済とは、ものが一通り揃って難の欠点もない状態、事が成るという意味である。既とは悉（ことごと）くと読み、万端のことが全て成るということである。

しかし、世の中の事は盛衰というものがあるから、一通り申し分のない状態であるというのは、そこで終わりになればかえって油断する。油断して乱れてくることが出てくる。これを大いに戒めていかないと、その盛りの状態が長く続くことは望めない。

六十四、【火水未済（かすいびせい）】

完成したものは、時間が経てばまた窮（きゆう）する所が出てくる。これは始めに返らなければいけない。終わってそこに止まれば窮していく。一つの事が終わったら、それで気が緩み、止まって尽きてしまうようではいけない。やはり、また始めに返って新たに事を興していく。天地が万物を生成化育していくように、造化の働きは尽き



ない。終わらない、何処まで行っても未完成なもの、これが【火水未済（かすいびせい）】である。未済とは、未完成という意味である。

未完成という点について言えば、それは事を為すための実力が不足していて、協力一致の実が挙がらないのである。力が足りないと、半分を過ぎたあたりから疲れが出てきて諦めてしまう。忍耐力が足りないのである。途中で気力が弱って諦めてしまえば成し遂げられるものは何も無い。これでは駄目だと上下お互いに奮発して、上の者は下を保護するように力を尽くし、下の者も自らを侮らないうで、努力を尽くして上下相通じていかなければならない。

今は造化一度休するという時期である。

終わるときは、新たな始まりを持って終わるのである。

これで六十四卦は一巡して、また始め【乾为天】に戻る。天は果てしなく発展していくから、人間もこれを手本として自己拡張・和親共栄をどこまでも図り、どこまでも努力していくのである。それが、「天行健 君子以自彊不息」（天の運行は健やかで止まるところはない。君子はそれに倣って、自ら努力を止めることはない）である。

陰陽相対原理により天【乾为天】は地【坤为地】と相俟ち、【水雷屯】から生成化育が始まる。物事は盛んになり【沢風大過】、強過ぎるところはまた逆運を呼んで【坎为水（習坎）】に陥り、そこから這い上がる【離为火】とところで上経は終わる。

下経は、新たなものと感じ合って繋がる【沢山咸】【風雷恒】とところから始まる。人より勝れる【雷山小過】とことで物事を完遂【水火既济】する。生々流転という普遍的な変化の道理によって、物事は変わり【火水未济】、また新たな始まり【乾为天】【坤为地】【水雷屯】【山水蒙】：・へ。と限りなく進んでいく。

その大きな流れの中を、己の天命である誠（仁義礼智・志・道）を以て、皆と相親しみ相助け、協力一致して生きるのである。

人間の目的は勝つことではない。天地の心で元亨利貞（仁義礼智）をどこまでも伸ばし、形にし、皆と相親しみ相助け己を全うすること（自己の実現・自他の共栄）である。

それを邪魔しようとするものとの戦いには、負けてはいけない。

今月も、健康と健闘を。